福岡県小学校
校　長　会　報

不易と流行

福岡県小学校長会　会長　**黒　澤　真　二**
（大野城市立大利小学校長）

福岡県小学校長会会員の皆様、こんにちは。令和五年度、福岡県小学校長会の会長を拝命しました、大野城市立大利小学校の黒澤真二と申します。どうぞよろしくお願いします。

さて、ここ三年、新型コロナウイルス感染症にともなう様々な会議の中止や実施方法の見直しなどを余儀なくされてきました。

しかし、本年五月八日からは、新型コロナウイルス感染症にかかわる位置付けが二類から五類へと移行されました。平時の生活に戻す方向へ大きく舵を切りました。約三年間、直接的にかかわることができない経験から、対面活動の価値を改めて認識しているところです。

このような経験から、子どもたちにとっての学びの教育効果を最大限に発揮できるように本年度は、次のような基本的な立場を取りたいと思います。

○会員、職員、児童の安心・安全を最優先としつつも校長の学びを止めない、喫緊の諸課題への対応の時期を逸しない立場から本会の研修、活動については、原則参集で実施します。

○校長の働き方改革等も踏まえ、適宜、ハイブリッド及びオンラインも組み入れます。

本年度は、「不易と流行」を福岡県小学校長会のスローガンに掲げ、今までの諸先輩方が築き上げてこられた校長会のよき伝統と時代の流れに沿う経営マネジメントを融合させ、変化の中で自ら新たな価値を創り出すことができるようにしていきたいと考えています。

具体的には、次のようなことを推進します。

事務局は、令和七年度福岡県で開催の全連小大会に向けて実行委員会を立ち上げ、政令市を含めたオール福岡で準備を組織的に行っていきます。また、県小学教頭会とも連携し、持続可能な人材育成をめざします。対策部は、ＩＣＴの利活用を含めた行政機関への要望活動の充実と三年間実施できなかった宮城県への視察研修を計画的に進めます。調査研究部は、全国大会に向けての副主題等の作成や各種アンケートの整理を行います。広報部は、会員が開きたくなるような県小学校長会ＨＰの作成に心掛け、各部でのデジタル化推進に努めて参ります。

各種研修会の講師陣も、学校経営に元気が出る方々を招聘しています。二年次校長研修会では、令和四年度まで全連小の会長であった東京都の大字弘一郎校長先生、第一回郡市会長研修会では、九小協会長及び長崎県小学校長会長の山﨑直人校長先生等です。各研修会での情報は、ＨＰ上でも今後、共有できるようにしていきます。

アフター・コロナとしての新たな学校生活がスタートした本年度。「不易と流行」のバランスを考えながら、福岡県小学校長会の活動をさらに充実させていく所存です。

本年度、どうぞよろしくお願いします。

そして、「皆で、校長職を楽しみましょう！」

発行人　福岡県小学校長会
会長　黒　澤　真　二

事務局　〒812-0053　福岡市東区箱崎２丁目52番１号
福岡リーセントホテル１階
TEL (092) 292－2292　　FAX (092) 292－2294

退任副会長挨拶

副会長退任にあたって

前副会長（福岡地区）江口尋信

退任にあたり、一言ご挨拶を申し上げます。

令和四年度、福岡地区小学校長会長、福岡県小学校長会副会長の役を賜りました。木下会長様をはじめ、運営の中核となっていただいた事務局、小学校長会事務所の皆様方には大変お世話になりました。

在任期間中、私が最も印象に残っていることは、令和四年五月に、東京において開催された全国連合小学校長会第七十四回総会・研修会に参加させていただいたことです。令和二年度から続くコロナ禍により、私たちは、共に集い学ぶ機会を奪われました。多くの研修会や会議等が中止になったり、あるいはオンライン開催となったりしました。そのような中、第七十四回総会・研修会が久しぶりに参集型で開催されることとなり、会場は大変な熱気に包まれていました。私も、少しばかり緊張しながら開会を待ったことを覚えています。総会後の研修会では、文部科学省からの行政説明が行われ、今後の初等教育の動向に関わる貴重な情報を得ることができました。このような学びの機会をいただけたことに心から感謝いたします。

また、福岡県小学校長会の木下会長様が「もっと身近に、福岡県小学校長会」というスローガンを掲げ、アフターコロナを見据えて精力的に活動を推進していただいたことで、各地区における校長先生方のご努力や創意工夫に触れることができたことも、大変貴重な経験となりました。ありがとうございました。

最後になりますが、今後の福岡県小学校長会のますますのご発展を祈念いたしまして退任の挨拶とさせていただきます。

副会長退任にあたって

前副会長（北筑後地区）岩城一磨

令和四年度の一年間、北筑後地区小学校長会長、県小学校長会副会長の役職を務めさせていただきました。初めて副会長として本会に参加し、運営の活動内容を知ることで、木下会長をはじめ、本部役員や事務局の皆様のご苦労も知ることになりましたし、新たな情報をいただくこともできました。一年間、貴重な経験をさせていただき感謝申し上げます。

昨年も感染症拡大防止のため数々の研修会が中止・延期されるなか、五月には、東京で開催された全国連合小学校長会総会・研修会に参加させていただきました。来賓の方々の私たち校長会に期待するメッセージ、文部科学省の方々の行政説明など、これからの教育についての新たな視野を拡げる貴重な経験ができました。

また、夏には福岡県小学校長会研究大会が飯塚市においてオンラインで開催され、秋には北筑後地区小学校長会研究大会も久留米市においてハイブリッド形式で開催されました。両研修会を通して各地区の各校長が同じ視座で取組を熱心に進めておられることがよく分かりました。とても充実した研修会になったと思います。いずれの研修会も担当地区の校長先生方が工夫され、研究大会を積極的に実施されましたことに対して敬意を表しますとともに、たいへん勇気もいただきました。

これから、福岡県小学校長会は、令和七年度の全連小福岡大会を目指して、県下の全校長の力を結集しながら、より一層発展していくことと確信しています。最後になりますが、福岡県小学校長会のますますのご発展と皆様方のご活躍を祈念しております。

副会長退任に当たって

前副会長（南筑後地区）松延　聡

令和四年度、南筑後地区小学校長会長として、県小学校長会にも関わらせていただきました。振り返ってみれば、コロナと戦ったこの数年。特に、昨年度は、「ウィズコロナ」の言葉の下、少しずつ日常が戻ってきた一年でした。

しかし、単純に元通りに戻るわけではなく、各種行事の縮小や延期といった変更によって負担軽減になったもの、ＩＣＴの活用により効果的効率的な運営が可能になったものなど、戻す上でも目的や価値を考える必要がありました。

その際、判断の基盤をつくる上で大きな役割を果たしてきたのが校長会だと思います。従来の経験や考え方だけでは対応が難しかったコロナ禍での対応。「学校とは」という本質を考える必要が多くありました。行事を縮小、延期、廃止する場合には、そのものの価値を再度捉え直す必要もありました。そういった時、校長会は、単に情報交換の場ではなく、多様な考えを出し合いながら協議し、考えを深め広げ明確に

する場にもなったと思います。

「不易と流行」。長い歴史の中で、新しい内容と共に長く守り続けてきたものまで、なくしてしまったということはないでしょうか。マスク着用を始めとした各種対応が緩和され、コロナが第五類となった今、私達は、再度教育の在り方についても考える岐路に立っているのかもしれません。今後も、校長会が判断の基盤であり続けることを願っています。

最後に、県小学校長会の運営にご尽力いただいた役員及び事務局の皆様、ご協力いただいた多くの会員の皆様に感謝申し上げ、今後の県小学校長会の更なる充実と発展を祈念しています。

副会長退任にあたって

前副会長（筑豊地区）　**合　田　賢　治**

令和四年度、筑豊地区小学校長会長及び県小学校長会副会長を務めさせていただきました。

令和四年度は筑豊地区（飯塚市）が夏の県小学校長会研究大会の担当地区ということもあり、年度当初から、非常に緊張しておりました。また、オンラインではありますが、三年ぶりの開催ということでしたし、五百人近い大規模ミーティングのホストなど、これまで全く経験がありませんでしたので、不安しかない状況で準備に取り掛からせていただいたのを覚えています。しかし、講演を株式会社グルーヴ・ノーツ代表取締役会長の佐々木久美子様に依頼したところ、非常にご多用な中にも関わらず快く引き受けてくださり、一気に大きな不安から解放されました。当日の講演では、「豊かな教育現場を実現する働き方とＤＸという考え方」という演題で、今後学校現場でも積極的に取り組んでいかなければならない課題について、ＩＴ企業のトップの立場からご教示いただくことができました。また、花村校長先生と石橋校長先生の素晴らしい実践発表や指導・講評をお願いした芋生教授のお話も配信会場で直接聴くことができ、運営を担いながらも、本当に貴重な時間を過ごさせていただきました。至らないところも多々あったと思いますが、多くの皆様のご協力によって、無事に研究大会を終えることができ、本当に感謝しております。

木下伸生会長様をはじめとして、事務局や幹事の皆様、ご協力くださった関係校長先生方、一年間、誠にありがとうございました。最後に、福岡県小学校長会のますますの発展を祈念いたしまして、退任の挨拶とさせていただきます。

副会長退任にあたって

前副会長（北九州地区）　**塩　田　昌　伸**

令和四年度、北九州地区小学校長会会長、県小学校長会副会長の役を賜りました。県校長会の組織や活動内容について、十分に理解できているとは言えない中でのスタートでしたが、木下会長をはじめ事務局幹事会の皆様や、他地区会長の皆様のお力添えをいただきながら、県小学校長会に関わらせていただきました。

振り返って、まず思い起こすのは、三年ぶりに参集して行われた全連小第七十四回総会・研修会への参加です。大字会長の挨拶では「我々校長が見るべきものは、目の前の子どもたちと教職員であり、子どもたちの未来と学校の未来の姿です」と述べられました。コロナ禍による活動制限がある中で、一生懸命に学ぶ子どもたちと、子どもたちの学びを止めないように創意工夫して教育活動にあたる本校教職員の姿が鮮明に思い浮かんできました。そして、「常に志高く自らを磨く気概ある校長であれ」と、自分自身の在り方を心に刻むことができました。また、全国から集まった会員の熱気を直に肌で感じられたことも、貴重な経験となりました。

その後、各種研修会へ多く参加させていただくことで、県校長会の組織や活動がよく見えるようになってきました。「もっと身近に、福岡県小学校長会」のスローガンのもと、綿密な計画と準備により大組織を運営されている様子は、地区や市での組織運営の参考になるとともに、大いに刺激を受けるものでもありました。

最後に、今後の福岡県小学校長会の充実とますますの発展を祈念いたしまして、退任の挨拶とさせていただきます。一年間、ありがとうございました。

副会長退任にあたって

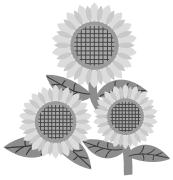
前副会長（京築地区）　**泉　　恵　美**

副会長退任にあたってご挨拶申し上げます。令和四年度の一年間、京築地区小学校長会長の役職とともに、県の副会長として県小学校長会に関わらせていただきました。県の本部役員や事務局の皆様と協議したり、事業の運営に携わ

ったりする中で、充実した活動内容を知り、改めて校長の職責の重さを実感いたしました。

新型コロナウイルス感染症の影響は昨年度も続きましたが、皆様と同様に感染防止策と学校教育活動の両立という課題と向き合いました。様々な対策を講じ、コロナ禍において、多くの決断をして参りましたが、七月一日に行った京築地区小学校長会研修大会もその一つです。三年ぶりの参集型の研修を計画し、万一に備えオンライン開催の準備も同時に進めていきました。当日は、幸いにも計画通りに京築地区の校長が集まり、実践発表等無事に実施することができました。兵庫教育大学大学院　特任教授　浅野　良一様には、オンラインにて「ｗｉｔｈコロナにおける学校組織マネジメント」についてご講演いただきました。コロナの時代において、管理職がもつべき新たな視点、学びの保障やアップデートなど、これからの学校組織マネジメントへの多くのご示唆をいただき、大変充実した研修会となりました。

最後になりましたが、令和五年度が会員の皆様にとってより充実した年になりますようお祈り申し上げますとともに、昨年度、ご支援とご協力くださったすべての皆様に心から感謝申し上げます。また、福岡県小学校長会の益々の充実・発展を心より願っております。一年間、本当にお世話になりました。



特集

新任校長として

もっとつながり、みんなを楽しく！

粕屋町立粕屋中央小学校長　冨　永　展　弘

自校昇任し、前校長先生から引き継いだ今年度の粕屋中央小学校のスローガンは、「もっとつながり、みんなを楽しく！」です。「みんなを楽しく」の「を」に、主体性を強める意味をこめている。と前校長先生より説明を受けていました。

本校は、今年度全校児童八百六十三名、特別支援学級十七クラスを含め全四十二学級、職員七十名の大規模校です。一学期始業式に全校児童の前で次のように話をしました。

「昨年のスローガンは『もっとつながり、みんな楽しく！』でした。つながるとは、大好きになることでしたね。大好きな人が増えると自分もがんばる力がわき、楽しくなっていきますよね。今年はさらにそれを進化させます。『もっとつながり、みんなを楽しく！』です。中央小の一人一人が、みんながもっとつながる、自分にできることをやっていこうというめあてです。楽しくする相手は中央小のみんなです。このみんなの中には、先生たちも含まれます。今ここにいる子どもたちと先生たちみんなが、自分にできることを考えて行動し、もっとつながり、みんなを楽しくする。そんな一年にしていきましょうね。」

始業式だけでなく、歓迎集会、運動会、全校朝会などにおいて、子どもたちの前で話す度に、このスローガンを確認するようにしています。職員にも職員会議や連絡会などにおいて、日々スローガンを意識して教育活動にあたるよう話をしています。また、保護者の方々にも必ずスローガンに関わる話をし、学校教育活動への協力を呼びかけています。

【スローガンの校内掲示物】

その結果、校務運営においては、校務分掌等の組織は昨年度と大きく変えていませんが、提案を起案制にしたり、ミドルリーダー会を設定したりするなど、各部会・係と管理職とがつながる工夫をしたこともあり、前年踏襲でなく、目的を意識した主体的な取組が提案・実行できています。

ＰＴＡ活動においては、昨年度より役員から、「できる人ができる時にできることを行う持続可能なＰＴＡ活動への協力」について説明していただいていたおかげもあって、ＰＴＡ改革で、各専門委員は廃止しましたが、学校行事や学年行事へのボランティア（かすやっちゅ応援団）には、多くの保護者に参加し協力していただいています。

そして、日々の教育活動においては、子ども

同士のつながりを意識した取組が工夫されており、昨年度に比べて不登校児童の減少傾向がみられ、落ち着いた学習指導が行われています。

学校経営の基盤として信頼関係と主体性の大切さを日々感じています。これからも「もっとつながり、みんなを楽しく」を発信し続け、私自身が子どもたちや職員、地域・保護者の方との信頼関係を強く築き、主体的に学校経営要綱の具現化に努めて参ります。

みんなが楽しい学校に

朝倉市立三奈木小学校長　**大　坪　和　之**

本年四月、平成三年の初任から十一年間お世話になった三奈木小学校に新任校長として赴任しました。当時はまだ木造校舎で、敷地内を流れる川を挟んで低学年校舎と中高学年校舎が配置され、町のシンボルとして建てられたレンガ造りの記念館（歴史資料館兼図書館）がありました。校舎のつくりは、子どもたちの身長に合わせて、窓や棚、黒板などの高さを変え、工夫を凝らしたものでした。まさに、今求められている、個別最適な学習そのものです。昭和二十六年にすでにそのような考えをもち、教育に注力された村長さんには感服いたします。赴任した年の夏から新校舎建築の関係でプレハブ校舎に移り、平成五年の四月に現在の校舎となりました。十一年間の中で関わった子どもたちが現在では保護者となり、当時の保護者の方たちが地域のお世話役として活躍してあり、長い時の流れを感じています。

さて、三奈木小学校は前述のように、敷地内に川が流れ、そこにはホタルをはじめとする、さまざまな生き物がいます。子どもたちは生活科や総合的な学習の時間の学習で、この豊かな自然についての学習を深めています。特に四年生は、ホタルの成虫捕獲から産卵、孵化、幼虫の放流までを地域の方からの指導で行っています。この活動の成果として、毎年五月から六月にかけてホタルが乱舞し、観光客が訪れるホタル見物のスポットとなっています。

校訓は「かしこく　やさしく　たくましく」で、知・徳・体の面からの育成を目指しています。本年度の重点目標は「学び方を身に付け、共によさを伸ばし合う子どもの育成」とし、主体性、協働性を大事にして基礎・基本の定着を図ろうとしています。また、管理職を除く十二名の教職員のうち、教職一年目から六年目の職員が七名と、三奈木小学校の大きな経営課題の一つが人材育成です。この若い教職員の授業力、学級経営力をいかに育てていくのかが、校長の私に課せられた課題だと思っています。そこで、校内研修担当や主幹教諭のミドルリーダーを核として、校内ＯＪＴの推進を行い、教師力の育成を図ろうとしています。

四月の始業式で、子どもたちには「みんなが楽しい学校にしたい」と話しました。これは、私が教職についてから大事にしてきたモットーです。みんなが楽しく学校生活を送るために大切なことは「思いやりの心をもつこと」であると付け加えました。自分や友達のお互いのよさがわかり、人の気持ちを考えられることのできる子どもたちに育ってほしいと願っています。人を大切にすることは、すべての教育活動の基盤だからです。戦争直後に子どもたちの健やかな成長を願って学校再建した村長さんの思いを引き継ぎ、子どもたちや教職員、保護者、地域の方にとって「楽しい学校」を目指していきます。

【校舎横の学びの川】

地域とともにある　学校を目指して

広川町立下広川小学校長　**安　達　幸　子**

本校は、県南の北西部に位置する自然豊かな学校です。木の香漂う新校舎で現在二百五十一名（十四学級）の子どもたちが学校生活を送っています。本校は明治六年に開校以来、百五十年にわたり地域に支えられ、愛される学校として存在しています。校区には「学校・家庭・地域連携推進会議」が組織され、学校の応援団として、登下校の見守りや総合的な学習におけるゲストティーチャー等、地域との日常的なふれあい活動を積極的に行ってきています。

本年度の重点目標は「自ら考え、つながりあう子どもの育成」です。重点目標達成のために校長として以下のことを取り組んでいきたいと考えています。

① 日指す児童像や授業像を具体的に説明し、

職員で共有する場を大切にする。

② 教頭、主幹教諭、事務職員との四者会で情報の共有と課題への方策を練る。

③ 授業改善と学級経営について、担任へのサポート体制を整える。

④ 保護者や地域への教育活動の情報の公開と理解を得る。

まず、経営方針や重点目標を四月当初に説明するだけでなく、研修会や職員会議の際に具体的に説明する機会を設けるようにしています。若年層の多い中で目標を共通理解することを大切にしています。

次に、重点目標を教室まで届けることや授業の質的管理を行うために教頭と主幹教諭との間で学級状況の情報共有及び課題への方策の協議をします。教頭には組織運営と人材育成の面から、主幹教諭には校内研修と教育課程の面から情報提供と方策の提案を行うようにしています。協議を通して、意志の疎通と指導を徹底するための方策を教頭と主幹教諭が具申できるように心がけています。

また、学級担任が孤立しないサポート体制づくりに関して、学級担任の意向を大切にしながら、学習支援員の配置や教室訪問後の指導、生徒指導への早期・組織的な対応を教頭や主幹教諭、担当者が自ら判断して行動できる環境づくりを大切にしています。

【150周年記念横断幕のもと、運動会準備を進めています】

これからの先行き不透明で予測できない様々な変化が想定される社会に生きていく子どもは、自分のよさや可能性を認識し、自力で歩みを進めるとともに、他者を価値ある存在と尊重し、つながりあいながら幸せを実現させていく力を備えることが重要であると思います。そのために与えられた環境下で教えてもらうのを待つのではなく、子ども自らが主体的に学ぶことが必要です。更に他者を尊重し、関わり合い、つながりあうことに重点をおき、教育活動にあたっています。

教職員一丸となって、魅力ある環境をつくり、伴走をする最強の「応援団」となれるように、そして、子どもたちに心からの笑顔と未来に生きて働く力を宿していけるよう努めていきたいと思っています。本年度百五十周年を迎えるにあたり、これからも地域に愛され、人が集い学び合う学校づくりに勤しみます。

子ども達にとっても、地域にとっても「行きたい学校」へ

嘉麻市立下山田小学校長　安藤裕子

本校は、周りは大法白馬山、梅林公園など自然に囲まれた全校六十四名の小規模校です。

令和元年度には百周年を迎え、記念式典等が行われました。昭和三十年代まで炭鉱が栄え、一番多い時で児童数は約二千五百名もいたそうです。地域の方から、度々懐かしい当時の学校の様子などを聞かせていただいています。

本年度の目指す学校像は、子ども達にとって、会いたい友達がいて参加したい授業がある「行きたい学校」。さらに、地域にとっても、子ども達と一緒に携わりたい活動がある「行きたい学校」です。年度当初、実態把握を行うため、学校のよさについて、教職員にアンケート後の聞き取りと学力調査等の結果から分析をしました。そして、重点目標を「自分の考えを表現し、協働的に解決できる児童の育成」「自他を大切にし、人から信頼される児童の育成」としました。

達成するための具体的方策は、三つ。一つは、思考力・表現力等向上のための思考活動を重視した授業改善。二つは、規範意識や非認知的能力を高めるための異学年、異世代とふれあう場の設定。三つは、学力格差を解消するための指導方法の工夫。これらを本校の強みである「素直な子ども達、協働的に教育活動を行う教職員、そして協力的な地域」を生かし、学校経営に臨んでいます。

組織的な取組になるためには、共通理解・共通実践が大切だと考えます。そこで、年度当初に共通理解を図るため、二つのことを行いました。一

【下山田クリーンアップ活動】

つは、目指す子ども像の共有です。説明するだけでなく、ワークショップで考えを出し合い、捉えを整理しました。赴任して間もない教職員もすぐに輪に入ることができるという効果もありました。二つは、学校経営構想の視覚化です。五月下旬に、前述した学校経営構想に関することを更新し、グランドデザインにまとめて配付、職員室にも掲示しています。今後も重点目標など、校長の話や学校通信等で、子ども達の姿を通して伝え、共通理解を促し、共通実践へつなげたいと考えます。

目指す学校の具現化に向けた本校の特徴的な教育活動に、「学校は学びのふるさと、下山田は心のふるさと」を合言葉にしたコミュニティ・スクールがあります。三部会があり、年間を通して、学校に隣接している公民館とも連携しながら、「花いっぱい運動」「梅ちぎり」「下山田クリーンアップ活動」等の活動をしています。今年度は、「山田川クリーン作戦」とし、中学校区まで範囲を広げ、四つの小中学校の取組として充実を図る予定です。

今後も、子ども達、教職員、地域の方と考えを出し合い、「私たちの学校は私たち自身でつくる」を目指したいと思います。

新しい時代に教職員と共に本気で取り組む

芦屋町立山鹿小学校長　**濵　田　亜貴子**

本校は、福岡県の北、響灘に面した町にあり、創立百五十年を迎える歴史のある学校です。校区には、国指定重要文化財の茶の湯釜の殆どを占める「芦屋釜」の復興に取り組む、三千坪の美しい日本庭園を誇る施設「芦屋釜の里」をはじめ歴史を肌で感じる名所があります。そのような校区に新任校長として着任しました。

初めて勤務する町で、分からないことばかりでしたが、前任の校長先生から引き継いだ本校独自の課題や、ｗｉｔｈコロナの時代に、従来の教育活動をどのように見直し再開するかということに、早々に着手することが求められました。そこで、まず新年度開始一日目に、これから皆で創っていく学校や教師の姿を示しました。

○「教師は、伴走者である」…子どもの様子をよく見て、変化を見逃さず、家庭や地域と共に育てる共育者になろう

○「教育は組織で行う」…学級担任、校務分掌は一ポジション。もっと守備を広げてみんなで教育しよう

○「教師は、『なぜ』『どのように』と子どもに問い続ける」…教えるだけではなく、考えさせる教育を推進しよう

○「教師は、子どもの活躍する場を与えてよさを認め、保護者に寄り添う」

この四点を中心に、教師が子どもや保護者の上に立ち、指導していくという考え方や、子どもは担任だけが育てるという古い教師観・教育観からの脱却を図っていこうと、自分の言葉に思いを込めて伝えました。

二日目には、教職員全員で、「目指す学校の姿を具現化するために」をテーマに、年齢や経験年数、在籍年数等が異なる小グループをつくり、自分の思いを出し合う場を設定しました。各々の教職員と課題を共有し、その課題を自分事として捉え、チームとなって取り組むためです。グループで出た意見を出し合ったり、最後の振り返りの時間で一人一人が自分の考えを発表したりする中で、先述の四点について考えを共有することができたように思います。

教育活動の見直しについては、教職員だけでなく、周りの方々の声に耳を傾け柔軟に行っています。毎年五月に開催する「浜運動会」は、高学年の鼓笛隊を先頭に、漁港傍の広場まで練り歩く全員行進や、会場内に特別に設置した土俵で行う「ちびっこ大相撲」など、地域に根付いた伝統行事です。しかし、コロナ禍で中止や内容変更が続き、復活は困難を極めました。そこで、踊りや相撲の指導などの地域の支援に加え、町教育委員会のお力添えをいただき近隣市の高校相撲部に協力をお願いしました。土俵づくりや用具の運搬等への教職員の負担軽減だけでなく、当日の相撲部によるデモンストレーションは会をさらに盛り上げ、「浜運動会」は大成功を収めました。このことは、本校の教育活動の支援体制を広げるヒントにもなりました。

今後も、これまでの伝統を引き継ぎながら

【山鹿小の伝統行事「浜運動会」】

も、新しい教育観で教職員一丸となって課題に本気で取り組み、子どもや保護者、地域に愛される学校づくりを目指していきたいと思います。

「あたりまえのことが あたりまえにできる学校」「地域と共にある学校」をめざして

豊前市立千束小学校長　小寺智暁

私は、千束小学校に四年前に新任教頭として赴任しました。豊前市の学校勤務は初めてで、市内の先生方をほとんど知らず、また、同じことをするにも少しずつやり方などが違うため、とても戸惑いながら一年目を過ごしたことが思い起こされます。

豊前市立千束小学校は、明治五年の学制頒布により「明親校」としてスタートし、明治十九年に「千束尋常小学校」となり、その後、何度か呼び名が改称され、昭和三十年に「豊前市立千束小学校」となりました。特別支援教育の歴史も古く、昭和三十年代に障がい児学級が本校に設置されていたという記録も残っている学校です。

校区においては、社会教育活動が盛んで、公民館、まちづくり協議会、青少年育成会議、スポーツ協会等の活動は学校との関わりが深く、地域間の交流活動が多く行われています。また、学校教育に対しても積極的な支援・協力を地域から得ており、「地域の子どもは地域で育てる」という意識の強い地域の中にある学校です。以前から区長会、青少年育成会議が中心となって「ちづか見守隊」を結成し、児童の登下校の安全を確保するため毎日、積極的に見守り活動をしてくれています。このように地域とともにある学校である千束小学校の子どもたちは、全体的に素直で、様々な活動に真面目に取り組むことができます。

職員は、近年どこの学校も同じような状況であると思いますが、若年教員の割合が高く、これから先、多くの経験を通じて子どもたちとともに成長を促していく必要があると感じています。

今年度、新任校長として引き続き同じ学校に勤務することになり、まず伝えたのが「当たり前のことが当たり前にできるようにしてほしい」ということでした。「自分や相手を大切にする」ことや「人の嫌がることはしない」ことはもちろんのこと「あいさつや返事」「使った物は元あったところに戻す」「廊下は静かに歩く」「靴をそろえる」などです。これらの「当たり前のこと」を身に付けることは、社会生活を営む上でとても大切なことだと考えています。特に、社会生活の入門期である小学校段階でしっかり身に付くようにすることは重要です。そこで、年度初めの会議の中で職員に「当たり前のことが当たり前にできるようにしてほしい」とお願いしました。また、一人一人が感じている「当たり前」は、育ってきた環境や触れてきた文化・経験によってずれが生まれてしまうことや状況によっても変わってくることもあるので、職員間でずれが生じないように会議等で共通理解を図るようにしていってほしいという話もしていきました。

まずは、子どもたちが社会生活を営む上で大切な土台づくりがしっかり行える学校にしていきたいと考えています。

五月八日に新型コロナウイルス感染症の感染症上の位置づけが第五類に引き下げられ、コロナ禍前の状況に戻りつつあります。地域との関わりもこれまで縮小や見合わせとなっていたものが再開されるようになってきました。子どもたちの教育は、学校だけでなく、学校・家庭・地域社会が相互に連携して行われることが重要だと言われています。しかし、コロナ禍の間に職員は半数近く入れ替わり、しかも経験年数三年未満の職員が半数を占めるようになりました。このため、これまで構築されていた地域とのつながりが引き継がれていないといった状況が生まれてきています。今後、地域主催の様々な行事への参加を奨励したり、地域の人々や保護者に学校ボランティアとして協力してもらう機会を増やしたりしながら家庭・地域とのつながりを再構築し、学校が大好き、千束が大好き、豊前が大好きな子どもを育てていきたいと考えています。

すごく平凡ですが、これまでに述べてきた二点を中心に学校経営をしていきたいと考えています。

【地域行事】